

京都市立病院紀要投稿規定

1. 本誌は京都市立病院の機関誌として年1回発行する。
2. 原則として投稿者は本院の職員とする。但し当院職員以外の者であっても編集委員の承認を得た場合はこの限りではない。
3. 本誌の内容は主に医学およびこれに関連する内容の論文を中心とし、その他の学術活動も広く記録する。なお論文は他誌に未発表のものに限る。内容は、総説・研究・症例報告と、短報・院内合同研究発表会などの記録・海外研修報告・CPC報告・院内研修会報告・研究業績集(原著・学会報告等)を中心とする。近畿病院図書室協議会共同リポジトリ(KINTORE)への登録対象は総説・研究・症例報告のみ(これらは医学中央雑誌での検索対象となる)とし、その他はKINTORE登録対象外(医学中央雑誌での検索対象外)となるため注意すること。院内合同研究発表会での発表内容でKINTOREへの登録を希望する場合は、総説・研究・症例報告として投稿すること。
4. 掲載論文の採否は編集委員が査読したうえで編集委員会で決定する。また、審査の結果、修正、削除、加筆を求められた場合は、査読者ならびに編集委員会の意見に従い対応すること。内容等については著者が全責任を負うものとする。
5. 原稿執筆の要領は次のとおりとする。
 - 1) 体裁：

原稿はWordファイル(A4版サイズ)を用いて作成し、デジタルデータをメールなどで提出すること。原稿の並べ方は、和文表題・所属・著者・要旨・キーワード、本文、引用文献、英文タイトル・著者・所属・abstract・key words、図表、図表の説明とする。本文と抄録の文字数、図表数等については以下の表を原則とする。論文は原則として邦文、横書き、平カナ、当用漢字、現代カナ使用を使用し、句読点はコンマ「,」ピリオド「.」とする。日本語で表せる用語はできるだけ日本語で表し、外国語は避ける。ただし外国人名、地名、酵素名、生化学的な物質名、薬品名は、原則として原語またはカタカナを用いる。また、薬品名は一般名で記載すること。度量衡はC.G.S単位とし、km, mm, l, dl, kg, g, mg, mEq/l, mg/dlなどを用い、数字は算用数字を用いる。
 - 2) 表紙：

表題・所属・著者の順に記載する。病院名も必ず所属診療科の前に記載する。当院退職後の共著者が現在所属している機関名は、その共著者名の上段に独立して記入するか、または、その共著者名の右肩に※印をつけて表題原稿の下部に同じ※印を付け、所属を記入する。なお、タイトルには原則として略語を使用しない。
 - 3) 和文要旨：

総説・研究・症例報告では、200字以内の和文抄録をつけ、そのあとに5個以内の和文のキーワードつける。
 - 4) 本文：

本文は25行×32文字で印字する。見出し語は総説・研究では「緒言」「目的・方法」「結果」「考察」「結語」、症例報告では「緒言」「症例」「考察」「結語」等と明確に記入する。見出し語には番号をつけない。短報・院内合同研究発表会などの記録・海外研修報告では見出し語は規定しないが、総説・研究・症例報告としての掲載を希望する場合はその体裁に従うこと。

例：(誤) I 緒言... III 結果
省略語を用いる場合、要旨・本文ともに、それぞれ

れ初出の際に日本語名を書き、続いて()に英語正式名：省略名を示す。

例：サイトメガロウイルス (cytomegalovirus : CMV)

児童相談所 (児相)

臨床試験の報告、未承認薬または適応外の使用例あるいは特殊な検査、治療例の報告は、臨床研究倫理審査委員会の承認および患者に対する informed consent を得たものであること。またその旨を論文に明記すること。

5) 文献：

出現順に肩番号(上付き、片括弧付き)を付し、本文の終わりにまとめて記載する。外国誌は List of Journals indexed for Medline に準じ、邦文誌は公式の略称または医学中央雑誌収載目録を使用する。著者名は3名までは全員を記載する。4名以上の著者の場合は3名までを記載し、「他」あるいは外国語文献の場合は「et al.」とすること。文献の表題は、副題を含めてフルタイトルとする。書き方は以下の形式に従う。

雑誌記事の場合：著者氏名：題名、副題、誌名 発行年；巻：ページ。

Levy MN, Imperial ES, Zieske H Jr: Collateral blood flow to the myocardium as determined by the clearance of rubidium-86 chloride. Circ Res 1961; 9: 1035-1045.

安部英, 前川正：凝固亢進状態の成因とその対策。臨血 1980；21：701-758。

図書の場合：著者氏名：書名、出版地、出版社、出版年、ページ (pp をつける)。

Winer BJ: Statistical Principles in Experimental Design. New York, McGraw-Hill, 1971, pp201-204, 210-218.

日野原重明 編：プライマリ・ケア医学－包括医療実践のために。東京、医学書院、1981, p46-55。

図書の一部の場合：著者氏名：題名。(in) 書名、編著者、出版地、出版社、出版年、ページ。

Fredrikson DS, Gotto AM: Familial lipoprotein disease deficiency. in The Metabolic Basis of Inherited Disease, Stanbury JB ed, New York, Mc-Graw-Hill, 1972, ch 26.

伊藤正男：ニューロンの働き。脳の生理学、時実利彦 編、東京、朝倉書店、1966, p92-114。

学会抄録の場合：著者氏名：抄録題名(抄録)、学会名、開催地、開催年、誌名 発行年；巻：ページ。

富沢忠弘：本態性高血圧の長期予後、特に高血圧性臓器侵襲度と予後の関係について(抄録)。第18回日本医学会、東京、1971、日本医学会誌 1972, p1801-1802。

降期力男：甲状腺癌の外科的治療指針(抄録)。第74回日本外科学会総会、東京、1974。日外会誌 1974；75：652-655。

加納 正：成人型原発性免疫不全症に関する研究。厚生省特定疾患調査研究班(班長 小林 登)昭和54年研究報告書、1980, p7。

オンライン資料の場合：著者名(編者名)：サイト名 [internet]。URL [最終アクセス日]。

小林祥泰：病院経営の問題点。日本内科学会内科臨床研修指導マニュアル [internet]。http://www.naika.or.jp/manual/52.html [accessed

2002.07.23].

野上耕二郎：EBM（根拠に基づいた医療）；わが国における EBM の現状と今後の展望. 東海ヘルスケア・クオリティ研究会講演 平成 11 年 10 月 30 日 [internet]. <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medinfo/tokaihcq/nogami~ppt/index.htm> [accessed 2002.07.23].

日本生理学会ホームページ [internet]. <http://www.soc.nii.ac.jp/psj/index.html> [accessed 2002.07.23].

6) 図, 表, 写真:

図は, 図と文字のバランスに留意して作成し, なるべく著者の原図を印刷に使用できるようにする. 文中に図表, 写真の挿入位置を指定する

7) 図表の説明:

表は上部に, 図は下部に, それぞれ題名を記入すること. 図表の説明文 (Legend) は, 本文が日本語の場合は日本語とする. ただし, 図表のすべてがある論文の中の引用の場合は, 引用図書あるいは雑誌名の書誌を明記するとともに原文のままよい.

8) 英文表題・著者・所属・abstract・キーワード:

英文表題・著者・所属の順に記載する. 病院名も必ず所属診療科の後に記載する. 総説・研究・症例報告では, 100 語以内の英文抄録をつけ, 英文抄録のあとに英語の key words 5 個以内をつけること. Key word については単語, 熟語の最初の word の頭文字を大文字とする.

例: Department of Respiratory Disease, Kyoto City Hospital Division of N2 Ward, Department of Nursing, Kyoto City Hospital

	本文文字数	和文抄録	英文抄録	文献	図表数	キーワード
総説	6000 字	200 字	100 語	制限なし	10 点以内	5 個以内
研究	6000 字	200 字	100 語	制限なし	10 点以内	5 個以内
症例報告	5000 字	200 字	100 語	20 編以内	7 点以内	5 個以内
短報	3000 字	不要	不要	10 編以内	4 点以内	不要
院内合同研究発表会などの記録	5000 字	不要	不要	不要	10 点以内	不要
海外研修報告	5000 字	不要	不要	不要	10 点以内	不要

- 6. 校正は著者が行い, 誤植の訂正程度にとどめる. 版の組みかえは行なわない.
- 7. 掲載料は無料とする.
- 8. 掲載原稿は原則として返還しない. 返還を希望するものはあらかじめ編集委員に申し出ること.
- 9. 論文提出期日, 編集要旨については編集委員会より別に定め掲示する. メ切りは厳守されたい.
- 10. 倫理規定

医学研究のための研究・症例報告は, 医学・医療の進歩に貢献するための重要な役割を果たしている. しかし, 患者の生命, 健康, プライバシーおよび尊厳をまもることは, 医療者・研究者側の責務である. 本誌に掲載する論文等において, 特定の患者の疾患や治療内容に関する情報には十分な配慮をしなければならない. 患者のプライバシー保護のため, 以下の規定を定める.

- 1) 患者個人の特定が可能な氏名, ID, イニシャルまたは「呼び名」などの愛称は記載しない.
- 2) 患者の住所は記載しない. ただし, 疾患の発生場所が病態等に関与する場合は区域までは記載することを可とする (京都府, 京都市など).
- 3) 治療経過の日付は, 臨床経過を知る上で必要となることが多いので, 個人が特定できないと判断される場合はよい.
- 4) 他の情報と診療科名を照合することにより患者が特定され得る場合, 診療科名は記載しない.
- 5) 既に他施設において診断・治療を受けている場合は, その施設名ならびに所在地を記載しない. ただし, 救急医療などで搬送元の記載が不可欠の場合は, この限りではない.
- 6) 人物写真の使用が不可欠な場合, 目の部分を隠すなど対象者の身元が特定できないように配慮する. 目疾患の場合は, 顔全体がわからないように考慮す

る.

7) 症例を特定できる生検, 手術摘出標本, 剖検, 画像情報などに含まれる番号などは削除する.

以上の事項を配慮してもなお個人が特定化される場合には, 発表に関する同意を患者 (あるいは家族) から得るか, 当院の倫理委員会に検討を要請し承認を得ることとする. 同意を得た場合は, その旨掲載記事に示されていることとする. すべての医学研究のための基本原則は, 世界医師会総会において承認されたヘルシンキ宣言に基づいており, 「WMA 医の倫理マニュアル 日本語版/日本医師会 編」を参考にされたい.

11. 著作権

- 1) 本誌掲載された論文の著作権は京都市立病院に帰属する (著作権法 第 27 条翻訳権・翻案権, 第 28 条二次的著作物の利用に関する原著作者の権利). なお本誌に掲載された論文等の著作物は, 原則として電子化 (PDF 形式等) し, 病院ホームページ・近畿病院図書室協議会共同リポジトリ (KINTORE) を通じてコンピュータネットワーク上に公開する.
- 2) 投稿する前に考慮すべき点として, 重複または二重掲載のないこと (既に掲載されたことのある論文と本質的にオーバーラップしない). 学術集会において発表された報告など会議録もしくはそれに類似する形式の掲載以外正式に出版されていない場合は, その投稿を妨げるものではない.
- 3) 投稿する論文に載せる図表 (写真も含む) が既に公表されたものである場合, オリジナルの出典を明示し, 必要に応じ, 著作権所有者の書面による承諾を得ること. 万一, 執筆内容が第三者の著作権を侵害するなどの指摘がなされ, 第三者に損害を与えた場合は執筆者がその責を負う.

作成 (改訂): 2024.5

編集委員会

委員長	田村 真一		
委員	中谷 嘉文	奥沢 康太郎	森 友彦
	富田 真弓	下久保 一博	中島 瑠菜
	乾 和江	佐々木 亜由美	藤田 博己
	宮城 華那子	前野 加奈	中島 美弥子
	谷口 美樹	岡村 寿子	

編集後記

2025年12月、京都市立病院は開設60周年を迎え、複数の菓子製造販売会社のご協力のもと、記念事業を実施することができました。節目の年を迎えた一方で、医療を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。京都市立病院では2年連続の赤字計上により手元資金が減少し、職員給与の支払いにも影響が及ぶ状況となっています。当院に限らず、多くの医療機関が同様の課題を抱えており、もはや医療機関の自助努力だけでは持続可能性を保つことが難しい構造となってきました。医療費に転嫁できない消費税率は上昇を続け、バブル崩壊後、長らく安定していた物価もこの3年で急速な上昇局面に入りました。収入は増えても支出の増加がそれを上回り、診療報酬が抑制されていることも収益悪化の一因となっています。こうした状況の深刻さは、今年に入りようやく「診療報酬改定が物価高に見合わない」という報道を通じて広く知られるようになりました。政権交代により今後の医療政策に一定の期待もあるものの、先行きは依然として不透明と言わざるを得ません。

私事ながら、約13年間勤務した京都市立病院を、2025年12月末をもって退職することとなりました。研修医としての1年半（1999年～）、医員としての2年間（2002年～）を含めると、20年近くを過ごした思い出の深い病院です。長い年月の中で多くの方々を支えられ、さまざまな経験を積むことができましたことに、改めて深く感謝申し上げます。現在、当院の今後のあり方について検討が進められていますが、70周年を迎える頃にはどのように変化しているのか、これからは外部から見守りたいと思います。

さて、本号では総説2編、研究4編、症例報告1編と、多くのご投稿をいただきました。さらに、第38回地域医療フォーラムの講演記録、第22回院内合同研究発表会の記録も掲載しています。いずれも読み応えのある内容であり、皆様の日々の診療や研究活動の一助となれば幸いです。私は本号の最終的な完成を見届けることはできませんが、これまで査読・構成・編集にご尽力いただいた皆様には、この場を借りて心より御礼申し上げます。今後、この誌面がますます充実し、京都市立病院の発展に寄与し続けることを願っています。

紀要編集委員長 田村 真一（小児科部長）

京都市立病院紀要 第45巻（通巻63号）2025年（令和7年）

編集者 京都市立病院紀要編集委員会
発行者 清水 恒 広
